

第五章 鬚黒大将家と内大臣家の物語 玉鬘と近江の君

[第一段 北の方、病状進む]

かの、*もとの北の方は、月日隔たるままに(疎遠になった月日が経つほどに)、あさましと(大将の冷淡さをますます情けないと)、ものを思ひ沈み(悲観して)、いよいよ呆け痴れてものしたまふ(いよいよ放心状態にお成りなさいます)。*「もとの北の方」は注に<鬚黒の元の北の方。場面は実家の式部卿宮邸に帰った北の方に転じる。「かのもとの」と表現したところに玉鬘が今の北の方におさまっていることをいう。>とある。はっきりとこう言われると、私まで寂しさを覚えるほどだが、火の消えたようになっていただろう大将家に新たな女房体制が敷かれた事を思えば、やはりそれはそれで目出度い気もする。

大将殿のおほかたの訪らひ(大将殿からの一通りの仕送りには)、何ごとをも詳しく思しおきて(どんなことでも気配りが行き届いて)、君達をば(子供たちには)、変はらず思ひかしづきたまへば(変わらない愛情を持って養育なさっていたので)、えしもかけ離れたまはず(全く縁が切れたわけではなく)、まめやかなる方の頼みは(生活面での面倒は)、同じことにてなむものしたまひける(以前と同じように大将頼みなのです)。

姫君をぞ(大将は姫君に)、堪へがたく恋ひきこえたまへど(無性に会いたがりなさいましたが)、絶えて見せたてまつりたまはず(宮家では一切接見を許しなさいませんでした)。*若き御心のうちに(姫君は子供心に)、この父君を誰れも誰れも許しなう恨みきこえて(この父君を宮家の誰もが許せないと責め立てて)、いよいよ隔てたまふことのみまされば(いよいよ遠ざけなされることばかりなので)、心細く悲しきに(自分には優しかった大将を内心では慕って、寂しく悲しがっていると)、男君たちは(大将家に引き取られた男の子たちは)、常に参り馴れつつ(宮家の母君の許に常に参り親しんで)、尚侍の君の御ありさまなどをも(尚侍の君のお暮らしぶりなども)、おのづからことにふれてうち語りて(自然に何かにつけて話題に出て)、*「若き御心」とは姫君 13 歳。

「まろらをも(私たちにも)、らうたくなつかしうなむしたまふ(親しんで優しくして下さいます)。明け暮れ*をかしきことを好みてもものしたまふ(いつも明るくしていらっしやいます)」*「をかしきことを好む」が、冗談を言うのか、風情を愛でるのか、その他の事柄なのか分からない。ただ、本来の藤原姫らしく明るく振舞ってはいそうだ。

など言ふに(などと言うのが)、うらやましう(うらやましく)、かやうにても安らかに振る舞ふ身ならざりけむを嘆きたまふ(自分だけがこのように気ままに振舞える身ではないことを嘆きなさいます)。あやしう(不思議なくらい)、男女につけつつ(をとこの子、をんなの子それぞれに)、*人にもものを思はする尚侍の君にぞおはしける(印象深い影響を及ぼす尚侍の君ではいらっしやいました)。*「人にもものを思はする」は<強く印象付ける>だろうが、こういう書き方をする作者の意図こそが印象深い。尚侍の君は、大将家の子供たちを通して大将の実直さを見直したのかも知れない。元々、担がれた王家の高慢さよりも、担ぎ手の土臭さが藤原姫の性に合っていた、とか。いや、所詮は雲上世界のことはあるが、傍目にも、そういう性根の女が王家の雅に憧れたという図式は好ましい。尚侍の君は源氏殿に感謝しているし、内大

臣は源氏殿への遠慮もあってか、あまり深い親しみは見せないでいるものの、君自身は実父たる内大臣への慕わしさを自分自身の拠り所と考えていた、という書き方を作者は一貫してしてきている。

[第二段 十一月に玉鬘、男子を出産]

その年の霜月に(しもつきに、十一月に)、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば(尚侍の君はとても可愛い乳飲み子までお産み為さったので)、大将も思ふやうにめでたしと(大将も願い通りに君が子を儲けて目出度いと)、もてかしづきたまふこと限りなし(その子を可愛がりなさる事この上ない)。そのほどのありさま(その可愛がりようというものは)、言はずとも思ひやりつべきことぞかし(言わずともお分かり頂けましょう)。

父大臣も(君の実父の内大臣も)、おのづから思ふやうなる御宿世と思したり(祝言を挙げた夫婦であってみれば、当然に望ましい両家の縁故たる御世継ぎとお思いでした)。

わざとかしづきたまふ君達にも(大将が殊更大事に為さる宮腹のお子様たちにも)、御容貌などは劣りたまはず(この稚児はお顔立ちなどは劣りなさない)。

頭中将も(内大臣家の長男である頭中将も)、この尚侍の君を(この君には懸想文を出したことがあることなどから)、いとなつかしきはらからにて(実の姉弟と分かって)、睦びきこえたまふものから(身内の付き合いを申し上げなさるものの)、*さすがなる御けしきうちまぜつつ(こうして君が大将の妻として収まることに、さすがに素直に喜べない素振りものぞかせ為さり)、*「さすがなるみけしき」は<さすがに納得できない御様子>だろうが、何が「さすが(それなりの事情)」なのかが分かり難い。藤中将は右近衛の中将なので、上司である右大将と君の結婚に賛成していた筈だ。君が右大将の子を産むことに今さら不満を抱く筈もない。下にある、帝の御子なら更に良かった、という言い方は文字通り同腹の妹である弘徽殿女御の立場を思えば、言い掛かりの類だろう。となると、藤中将がこだわっているのは、姉弟だとは知らなかったとは言え、かつては自分も懸想文を出した相手が、子を儲けていよいよ身を固めてしまうことへの寂寥感だろうと推測した。サラッと書いているが、難文だ。

「宮仕ひに(入内した)、かひありてもものしたまはましものを(甲斐があつてのご出産だったらもっと良かったものを)」

と(と分け知り顔で)、この若君のうつくしきにつけても(この若君の可愛らしきにつけても)、

「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに(帝の今まで皇子たちのいらっしやらない嘆きを押し申せば)、いかに面目あらまし(いかに名誉だったことか)」

と、あまりのことをぞ思ひてのたまふ(この上に過ぎた高望みを考えて仰います)。

公事は(おほやけごとは、尚侍の君は公務を)、あるべきさまに*知りなどしつつ(大将邸で居ながらに取り仕切っていて)、参りたまふことぞ(参内なさることは)、やがてかくてやみぬ*べかめる(このまま取り止めになる模様です)。*さてもありぬべきことなりかし(それも仕方の無いことなのでしょう)。*「しる」は<司る>で尚侍としては、女官たちの各種業務報告を聞いて了承するという最終

決裁を下す監督業務を執務したのでだろう。多くの女官たちの尚侍詣でに大将邸は賑わったことだろう。*「べかめる」はく〜ということになりそうです。ということは、出産が無かったら、尚侍の君はやがて「参りたまふこと」になっていたのか。まあ、尚侍なのだから本来は内裏に居て当たり前なのだろうが、この辺りの役職や身分の人事決定と、その実際の業務形態の自由度は何か不思議だ。この物語の存在自体にも通じるが、藤原氏ならではに許された緩さだとしても、この独特な開放感は違和感を覚えるほど奇異だ。*「さてもありぬべき」はくそうした次第も在ってしまい得る→それも仕方の無い。「かし」はくかも知れない→という事態の可能性の再確認で、その事態を「べし」と既に了解しているのでくそうかも知れない→それで良いだろう→という言い方、だろう。

[第三段 近江の君、活発に振る舞う]

まことや(ところで)、かの内の大殿の御女の(かのうちのおほいどののおほんむすめの、あの内大臣の御息女の)、*尚侍のぞみし君も(尚侍を望んでいた姫君も)、*さるものの癖なれば(そうした低俗な育ちの者の常として)、色めかしう(色気づいて)、さまよふ心さへ添ひて(浮き足立つ好奇心が出て来て)、*もてわづらひたまふ(殿は処遇を持って余しなさいます)。*「尚侍のぞみし君」は注に<近江の君。「行幸」巻(第三章六段)に見える。>とある。昨年二月の、当時の対の姫の尚侍就任の地固めとしての裳着を羨んで、近江の君が自分こそ推挙されるべきだと主張した場面だ。その十月に対の姫は尚侍に就任し、しかしその直前の九月に大将に犯され、今や大将家の北の方に納まり、子まで儲けた。同じ内大臣を父に持ち、同じく外腹で、同じく市中の女腹にして、この一年余りの間に斯くも差が開いた人生を、この姫君は呈している。尤も、違いはこの一年半に生じた訳ではなく、生まれも育ちも最初から違ってはいたが、それでも内大臣の実の娘同士には違いない。尚侍の君 24 歳、近江の君は推定 18 歳。*「さるもの」は注に<『集成』は「そうした賤しい生れの者の性としてよくあることなので」と注す。>とある。*「もてわづらひたまふ」は注に<内大臣は近江の君をもてあましていらっしゃる。>とある。

女御も(腹違いの姉にしてこの君の教育を殿から任された弘徽殿女御も)、「つひに(その内)、あはあはしきこと(軽はずみな失態を)、この君ぞ引き出でむ(この君なら仕出かすに違いない)」と、ともすれば(何かに付け)、御胸つぶしたまへど(はらはらしていらっしゃったが)、「女御」は弘徽殿女御 21 歳。近江の君を女房として使いながら、行儀作法を仕込むという事らしいが、見限れ無い辛さは相当な負担だろう。

大臣の(父の内大臣が)、「今は(もう)、な*交じらひそ(女御の女房仕えは止めなさい)」と、制しのたまふをだに聞き入れず(禁じ申されるのをさえ聞き入れず)、交じらひ出でてものしたまふ(内裏で人前に出て振舞いなさいます)。*「まじらふ」は<社交する>で、特に<宮仕えする>であり<女房勤めをする>ということらしい。

いかなる折にかありけむ(いつの時でしたか)、殿上人あまた(貴公子たちが大勢)、おぼえことなる限り(高い身分の者ばかりが)、この女御の御方に参りて(この女御のお部屋に参上して)、物の音など調べ(楽器を演奏し)、なつかしきほどの拍子打ち加へてあそぶ(楽しく拍子を取って歌い合わせるといふ)、秋の夕べのただならぬに(秋の夕べの一際風情のあるところに)、宰相中將も寄りおはして(源氏の参議中將も寄っていらして)、例ならず乱れてものなどのたまふを(何時に無く打ち解けて冗談を仰るのを)、人びとめづらしがりて(女房たちが喜んで)、

「なほ(やはり)、人よりことにも(他の人とは違う)」

とめづるに(と褒めると)、この近江の君(この近江の君は)、人びとの中を押し分けて出でゐたまふ(女房たちを掻き分けて前にいざり出て来なさいます)。

「あな、うたてや(あら厭だ)。こはなぞ(何事でしょう)」

と引き入るれど(と女房たちは君を押し戻すが)、いとさがなげににらみて(向きになって睨み付けて)、張りゐたれば(頑張って居座るので)、わづらはしくて(面倒になり)、

「あうなきことや(変なことを)、のたまひ出でむ(仰らないかしら)」と、つき交はすに(目配せしていると)、この世に目馴れぬまめ人をしも(この世にも珍しい真面目な人のことを)、

「これぞな(この人か)、これぞな(この人だ)」

とめでて(と興奮して)、ささめき騒ぐ声(呟いてはしゃぐ声が)、いとしるし(良く通ります)。人びと(女房たちは)、いと苦しと思ふに(とても気まずく思ったが)、声いときはやかにて(君は声も高くはっきりとして)、

「沖つ舟よるべ波路に漂はば、棹さし寄らむ泊り教へよ (和歌 31-20)

「沖の波路に漂えば、立派な棹も役立たず (意識 31-20)

*注にく近江の君の夕霧への贈歌。「沖つ舟」に夕霧を喩える。「なみ」は「寄る辺なみ」(寄る辺がないのでの意)と「波路」の掛詞。「漂はば」は夕霧と雲居雁との結婚が決まっていないことをいう。「棹さし寄らむ」は自分の方から近寄って行こうの意。>とある。「よるべ」は「夜べ」だから、「とまり」が「止まり(居場所)」と「泊まり(共寝)」を強く意識させて、「をしへよ」の色っぽさが増す。それなりに馴染んだ仲の海つながりの場面で詠んだなら、味わいの在りそうな歌だが、ぶしつけの「棹さし寄らむ」では余りにも下品な商売女風の響き。

*棚なし小舟漕ぎ返り(是はさすがに出しゃ張り過ぎと、古歌にあるように「棚なし小舟漕ぎ返り」と思いますが)、同じ人をや(いや是はまた「同じ人」などと当て付けがましい言い方になってしまつて)。あな(大変)、悪や(失礼しました) *「棚無しをぶね」は<船棚の無い小舟。>と古語辞典にある。「ふなだな」は「船柁」と表記があり<船の両端に取り付けてある板。船頭が棹さすために上がる所。>とある。小さくて小回りの利く所が取柄の船だろうか、棹を大きく振ることも無く、チョコチョコ小突いて動くような印象で、どうも小者を揶揄する言い方に聞こえる。この文の注には<「堀江漕ぐ棚なし小舟漕ぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ」(古今集恋四、七三二、読人しらず)の第二句から第四句まで引用する。引き過ぎであるところが近江の君らしく普通と変わっている。以下「あな悪や」まで和歌に添えた文。>とある。引用歌は<狭い掘割を縫って律儀に往復する渡しのように同じ人を恋し続けるのだろうか>という歌筋で、是が逃れられない恋の虜のことなのか、ついに束縛に我慢し切れなくなって別れを決意したのか、何か別の複線が有つての言葉遊びなのか、背景が分からないので読み切れない。ただ、近江の君は源中将と幼馴染みの藤原姫との恋仲をからかっているに違いない。「同じ人」まで被せるのは引き過ぎだと注は言うようだが、「同じ人をや、あなわるや」の音韻は「にや」を「をや」に変えただけで、引歌の「棚なし小舟漕ぎ返り」と言えば「同じ人にや恋ひわたりなむ」と言う下句だが、そう言えば、あ

あなたは同じ恋人を思い続けているんですけど、と、引歌では反語の係助詞として使われていた「や」を、今初めて気付いたかのような感嘆の「や」に変えて、「あなわるや(是は失礼しました)」と惚けているのであって、滑稽な場面だが、語用は練れている。というのも、「棚なし小舟漕ぎ返り」は「棹さし寄らむ」を受けていて、「棚無し」はその「棹さし寄らむ(私が言い寄ろう)」の<効果が無くて>という意味で、「小舟漕ぎ返り(諦めて引き上げる)」と言い掛けた、という体裁になっているからだ。是はとても綿密に企画された筆致だ。軽妙さや品の無さは近江の君らしい気もするが、この語りの周到さは不似合わないし不気味で、この近江の君譚は藤原氏の単なる自虐ネタに止まらない奥行きを感じさせる。

と言ふを(と言うのを)、いとあやしう(源中将はとても怪しんで)、

「この御方には(この女御のお部屋には)、かう用意なきこと聞こえぬものを(こんな不仕付けな物言いをする者は居ない筈だが)」と思ひまはずに(と考えめぐらすに)、「この聞く人なりけり(これが噂に聞く姫君か)」と、をかしうて(可笑しくなって)、

「よるべなみ風の騒がす舟人も、思はぬ方に磯伝ひせず」(和歌 31-21)

「嵐に遭うと分かったら、小舟は岸を離れない」(意識 31-21)

*注に<夕霧の返歌。「なみ」は「寄る辺なみ」(寄る辺がないのでの意)と「波風」の掛詞。「舟人」は自分を喩える。「思はぬ方」は近江の君を喩える。>とある。「風の騒がす(風に翻弄される)」や「磯伝ひ(岸沿い)」に何か特別の意味があるのかも知れない。特にこの語を使う意図は分からない。岸から綱で引かれて進む船があったらしいが、そのことだろうか。ざっと、嵐でも舟は見当違いの岸には着かない、という筋だと読んで置く。

とて(と軽くお断りのお応えをなさって)、はしたなかめり(君は何ともはしたない次第だった)、とや(ということのようですよ)。

(2011年9月6日、読了)